

夙川学院短期大学

教育実践研究紀要

第3号 [2010]



教育実践研究論文

<第3類>

- ・保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [1]
- 「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」に関するアンケート調査結果より-
..... 朝野典子
- ・「特別活動の指導法」における校務演習の導入と
実践的指導力に対する学生の自己評価..... 森田健宏

<第6類>

- ・「大学における地域子育て支援 -しゅくたん広場での実践-」
..... 井上千晶・番匠明美・三木麻子

夙川学院短期大学「教育実践研究紀要」【SBET】投稿の手引き

1. 原稿の種類 (年1回3月発行)

教育紀要に掲載されるものは、以下に示されるカテゴリーに分類される。

- 第1類：大学教育の理念や思想に関するもの
- 第2類：大学教育の制度、法およびその運用に関するもの
- 第3類：大学における専門教育に関する方法、技術、課題に関するもの
- 第4類：大学教育に適した教具・教材の開発およびその利用効果に関するもの
- 第5類：大学生の心身の特性と教育のあり方に関するもの
- 第6類：その他、大学教育の実践に関するもの

2. 投稿に関する手続き

- (1) 文の構成は、「問題の所在(または目的)」「方法」「結果」「考察」「結論」を基本とするが、教育分野や論の特性に応じて適切な章立てを設定することができるものとする。
なお、参考・引用文献等がある場合、必ず文末に付記する。
- (2) 原稿は原則として、Microsoft Word(表作成についてはMicrosoft Excelも可)により作成し、完成イメージで提出する。自筆による原稿の場合、自費(または個人研究費)において人力費用を負担しなければならない。この場合、編集会議が配布するフォーマットを利用することが望ましい。その他、文字数・行数・フォント等、執筆の詳細についてはフォーマットを参照のこと。
- (3) 原稿は、完成イメージで4枚以上とし、最大10枚以内まで増頁することができる。
なお、10枚を超える場合、分筆等を求めることがある。
- (4) 写真、図については、各自が画像ファイルとして作成し、原稿内に貼り込むものとする。
全てグレースケールで印刷されるため、出版時に画像の精細等に関する要求は一切受け付けない。ただし、カラー写真による掲載を希望する場合、自費(または個人研究費)により、載せることができる。
- (5) 投稿にあたっては、以下の2種の手続きのうち、いずれかによるものとする。
<A>投稿票、完成イメージで作成し印刷した本文、本文の電子ファイル、写真・図の電子ファイルを直接、FD委員会事務局(教務課)に提出する。ただし、電子ファイルはMOまたはCD-RWに保存する。
電子メールに、投稿票、本文、写真・図の電子ファイルを添付し、FD委員会事務局に送信する。

3. 編集に関する手続き

- (1) 原稿が投稿されると、編集会議において1名のピアスーパーバイザー(PS)が決定される。
- (2) PSは、受稿後速やかに精読し、質問および意見をまとめ、投稿者に返信する。なお、PSが提示する意見や質問は、本誌が多様な読者を想定していることから、専門分野を熟知した内容でなくてよいこととする。
- (3) 投稿者はPSから提示された質問や意見について、回答または修正等を行い、再び提出する。
- (4) PSは回答または修正を確認し、「ピアスーパービジョン実施報告書」にコメント等、必要事項を記入の上、編集会議に提出する。

夙川学院短期大学

教育実践研究紀要

第3号【2010】

【教育実践研究論文】

<第3類>

- ・保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [1]
- 「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」に関するアンケート調査結果より-
_____ 朝野典子・・・3
- ・「特別活動の指導法」における校務演習の導入と
実践的指導力に対する学生の自己評価
_____ 森田健宏・・・11

<第6類>

- ・「大学における地域子育て支援 -しゅくたん広場での実践-」
_____ 井上千晶・番匠明美・三木麻子・・・17
- ・「あとがき」
FD委員長 森田健宏・・・25

保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [I]

— 「実習前のリハーサル」と 「実習後の報告」 に関する

アンケート調査結果より—

朝野典子

ASANO Noriko

本稿は、夙川学院短期大学専攻科（保育専攻）において筆者が担当する保育音楽療育演習の教育実践に関する研究であり、2009年度の履修学生45名に対するアンケート調査の結果に基づく。この科目では、主として音楽療育活動の実践方法を指導し、後期授業においては保育音楽療育実習のための「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を全員が行うことにより、学生が実習経験を共有することをめざした。

アンケートでは、「実習前の自己イメージ」「リハーサルを経験して感じたこと」「他の人の実習報告を聞いて感じたこと」「実習を終えて感じたこと」の4領域（合計20項目）について質問し、回答を得た。

その結果、実習直前にリハーサルを経験したことによる効果と、他者の実習報告を聞くことによる効果が確認された。また、学生の約半数は、「実習をやめたいと思ったことがある」と答えているが、実習後はほぼ全員が「実習を通して自分は成長できた」と肯定し、実習経験に意義を感じていることが明らかになった。

キーワード：保育音楽療育、実習、リハーサル、実習報告、共有

1. はじめに

保育音楽療育士は、一般財団法人全国大学実務教育協会が認定する資格であり、その教育課程ガイドラインに掲げられた教育目標には、「障害児教育において、発達の視点を入れながら、保育と音楽療育に関して高度の知識と技能をそなえた障害児の専門職として、さらに生涯学習に関与できる人材の養成を目指す」とある。

この資格は、保育士または幼稚園教諭免許を有することを基礎資格とし、履修が必要な科目は、必修科目と選択科目を合わせて30単位以上になる。

必修科目には実習（3単位）が含まれ、学生は児童から高齢者まで幅広い領域において実習を行う。そこで障害児や高齢者への生活支援を学びながら、学生自身が作成したプランに基づいて音楽を使った療育活動（音楽療育活動）を行う。つまり、実習は学生が習得した専門知識と音楽技能を駆使して対象者と直接ふれあうことによって理解を深め、実際に音楽療育を実践する機会なのである。

筆者は、2008年度より夙川学院短期大学専攻科（保育専攻）において、保育音楽療育士養成課程の必修科目である保育音楽療育演習（通年科目）を担当してきた。

前期授業では、療育としての音楽活動の方法、対象

者に合わせた目標設定と活動プランの立て方等について、実習に向けた下準備を指導する。後期授業では、実習準備と実習のまとめを指導する。

ただし、実習全般を直接指導するのは専任教員であり、筆者は実習の一部分である音楽療育活動について、事前および事後に部分的な指導を行う。学生全員が同時期に実習を行うスタイルではないため、保育音楽療育演習では「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を通して、学生同士が実習経験を共有することをめざした。

実習直前の学生は、実習施設で行う音楽療育活動のリハーサルを行い、教員や他の学生からアドバイスを受ける。学生がリハーサルを通して自分自身の話し方や声の大きさ、歌や演奏の速度、活動の展開等が適切であるか等について考え、改善し、自信をつけて実習に臨めるように、さらに、他の学生の意見を広く取り入れて活動内容の質を高めて実習に臨めるよう期待した。

また、実習を終えた学生は施設や対象者の様子、音楽療育活動の実際について翌週の授業で報告し、各自の課題を見つけて次回の実習に備える。実習を経験していない学生にとっては、報告を聞き、不明な点を質問することにより実習への不安が取り除かれると期待した。

2. 方法

2.1 調査対象・期間

調査対象は、保育音楽療育演習を履修する45名である。調査の対象とする期間は、「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を行った2009年10月～2010年1月である。全員の実習が終了した2010年1月末に無記名のアンケート調査を実施した。

2.2 手続き

アンケートを集計し、筆者の授業記録を参照しながら結果を分析した。

3. 内容

3.1 「実習前のリハーサル」の概要

後期授業開始時に「実習前のリハーサル」の目的と、リハーサルの実施手順を説明した。

<リハーサルの手順>

- ・実習に行く者は、実習直前の授業で音楽療育活動のリハーサルを行う。
- ・リハーサルの時間は、実習施設での音楽療育活動の時間と同じとする。
- ・リハーサルでは、実習で使用する楽器、歌詞幕、道具等を準備して使用する。
- ・実習者以外の学生は、対象者役（障害児や高齢者）となって協力し、リハーサル終了後、積極的に質問や助言をする。
- ・実習者は、リハーサルで得た経験と、教員や学生からの助言を受けて、音楽療育活動の内容を再検討し、よりよいものにして実習に臨む。

リハーサル終了後、セラピストを演じた学生は実際に演じて気づいたことや反省点などを話し、続いて対象者役の学生が意見や感想を述べ、その後、教員が具体的に助言を行った。

3.2 「実習後の報告」の概要

実習を行った学生は、翌週の授業時に数分程度の報告を行った。報告するときに留意すべき点と内容について、次のように学生に伝えた。

<報告の留意点>

- ・前に出て、はっきりとした声で話す。
- ・話を聞く人に実習の様子がありありと伝わるよう、わかりやすく丁寧に説明する。
- ・これから実習に行く人が知っておいたほうが良いと思うことを、忘れずに伝える。

<報告する内容>

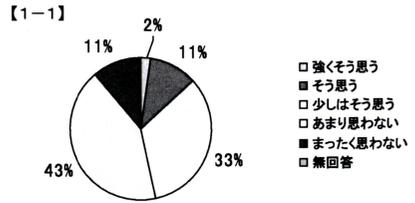
- ・実習の概要：施設名、実習時間、1日の流れ
- ・音楽療育活動：活動時間帯、クラス・グループ名、対象者の様子（障害の程度や反応）、活動内容、職員の様子
- ・感想と課題、反省と改善方法
- ・申し送り事項

3.3 アンケートの質問内容

【1-1】～【4-3】について、「強くそう思う」「そう思う」「少しはそう思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の5段階で回答を求めた。

<実習前の自己イメージ>

- 【1-1 初対面の人と打ち解けやすい】
- 【1-2 人前で話すことが好きである】
- 【1-3 人前では緊張するタイプである】
- 【1-4 人前で楽器を演奏することが好きである】
- 【1-5 実習をやめたいと思ったことがある】



<リハーサルを経験して感じたこと>

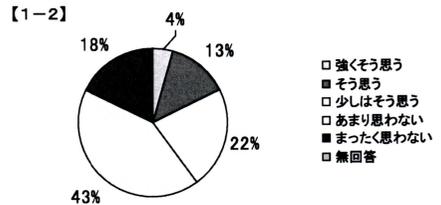
- 【2-1 リハーサルはうまくできた】
- 【2-2 実習の自信がついた】
- 【2-3 実習への不安が軽減した】
- 【2-4 自分の準備不足に気づいた】
- 【2-5 リハーサルは緊張した】
- 【2-6 リハーサルはしたくなかった】
- 【2-7 リハーサルは必要ない】

【1-2 人前で話すことが好きである】では39%が肯定し、61%が否定している。

内訳：「強く思う（4%）」「そう思う（13%）」「少しはそう思う（22%）」「あまり思わない（43%）」「まったく思わない（18%）」

<他の人の実習報告を聞いて感じたこと>

- 【3-1 自分の実習の参考になった】
- 【3-2 実習の不安が軽減した】
- 【3-3 自分の実習が楽しみになった】
- 【3-4 実習の振り返りに役立った】（自分の実習を終えてから他の人の報告を聞いた場合）
- 【3-5 報告を聞く必要はなかった】



<実習を終えて感じたこと>

- 【4-1 音楽療育活動はうまくいった】
- 【4-2 リハーサルは実習に役立った】
- 【4-3 実習を通して自分は成長できた】

【1-3 人前では緊張するタイプである】では96%が肯定し、4%が否定している。

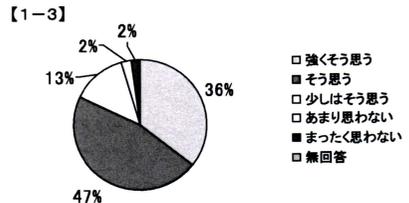
内訳：「強く思う（36%）」「そう思う（47%）」「少しはそう思う（13%）」「あまり思わない（2%）」「まったく思わない（2%）」

4. 結果

4.1 実習前の自己イメージ

【1-1 初対面の人と打ち解けやすい】では46%が肯定し、54%が否定している。

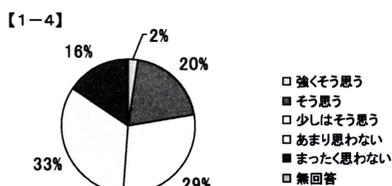
内訳：「強く思う（2%）」「そう思う（11%）」「少しはそう思う（33%）」「あまり思わない（43%）」「まったく思わない（11%）」



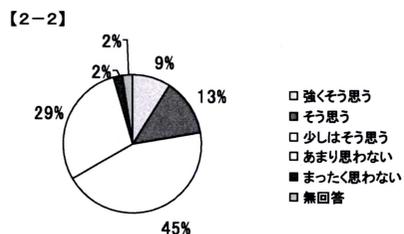
【1-4 人前で楽器を演奏することが好きである】では51%が肯定し、49%が否定している。

内訳：「強く思う（2%）」「そう思う（20%）」「少しはそう思う（29%）」「あまり思わない（33%）」「ま

まったく思わない (16%)」

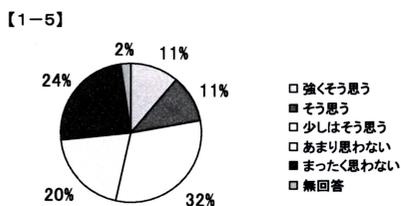


しはそう思う (45%)」「あまり思わない (29%)」「まったく思わない (2%)」



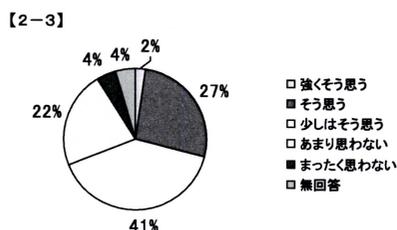
【1-5 実習をやめたいと思ったことがある】では54%が肯定し、44%が%否定している。

内訳:「強く思う (11%)」「そう思う (11%)」「少しはそう思う (32%)」「あまり思わない (20%)」「まったく思わない (24%)」



【2-3 実習への不安が軽減した】では70%が肯定し、26%が%否定している。

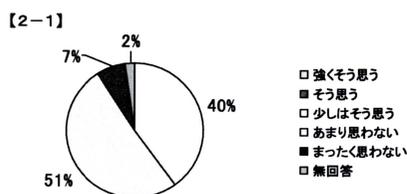
内訳:「強く思う (2%)」「そう思う (27%)」「少しはそう思う (41%)」「あまり思わない (22%)」「まったく思わない (4%)」



4.2 リハーサルを経験して感じたこと

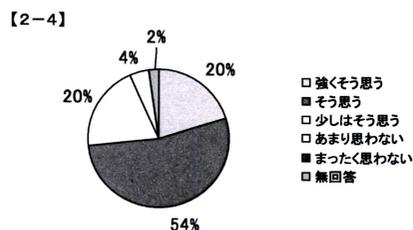
【2-1 リハーサルはうまくできた】では40%が肯定し、58%が否定している。

内訳:「強く思う (0%)」「そう思う (0%)」「少しはそう思う (40%)」「あまり思わない (51%)」「まったく思わない (7%)」



【2-4 自分の準備不足に気づいた】では94%が肯定し、4%が%否定している。

内訳:「強く思う (20%)」「そう思う (54%)」「少しはそう思う (20%)」「あまり思わない (4%)」「まったく思わない (0%)」



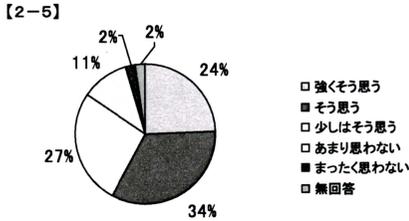
【2-2 リハーサルをして実習の自信がいった】では67%が肯定し、31%が否定している。

内訳:「強く思う (9%)」「そう思う (13%)」「少

【2-5 リハーサルは緊張した】では85%が肯定し、13%が%否定している。

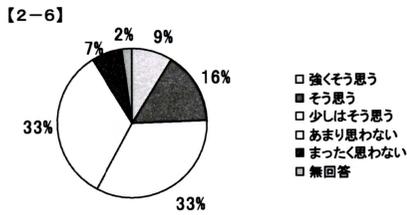
内訳:「強く思う (24%)」「そう思う (34%)」「少しはそう思う (27%)」「あまり思わない (11%)」「ま

まったく思わない (2%)」



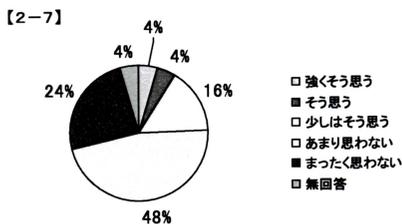
【2-6 リハーサルはしたくなかった】では58%が肯定し、40%が否定している。

内訳:「強くそう思う (9%)」「そう思う (16%)」「少しはそう思う (33%)」「あまり思わない (33%)」「まったく思わない (7%)」



【2-7 リハーサルは必要ない】では24%が肯定し、72%が否定している。

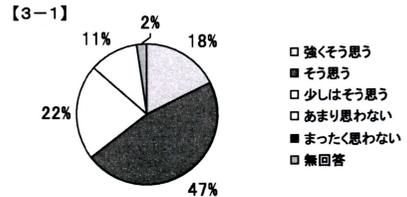
内訳:「強くそう思う (4%)」「そう思う (4%)」「少しはそう思う (16%)」「あまり思わない (48%)」「まったく思わない (24%)」



4.3 他の人の実習報告を聞いて感じたこと

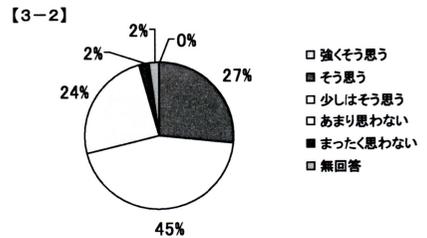
【3-1 自分の実習の参考になった】では87%が肯定し、11%が否定している。

内訳:「強くそう思う (18%)」「そう思う (47%)」「少しはそう思う (22%)」「あまり思わない (11%)」「まったく思わない (0%)」



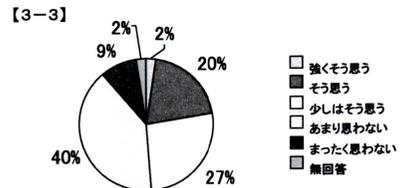
【3-2 実習の不安が軽減した】では72%が肯定し、26%が否定している。

内訳:「強くそう思う (0%)」「そう思う (27%)」「少しはそう思う (45%)」「あまり思わない (24%)」「まったく思わない (2%)」



【3-3 自分の実習が楽しみになった】では49%が肯定し、49%が否定している。

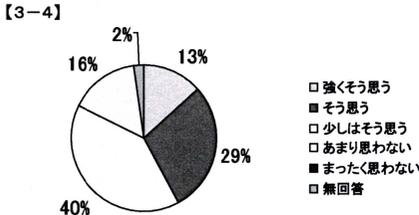
内訳:「強くそう思う (2%)」「そう思う (20%)」「少しはそう思う (27%)」「あまり思わない (40%)」「まったく思わない (9%)」



【3-4 実習の振り返りに役立つ (自分の実習を終えてから他の人の報告を聞いた場合)】では82%が肯定

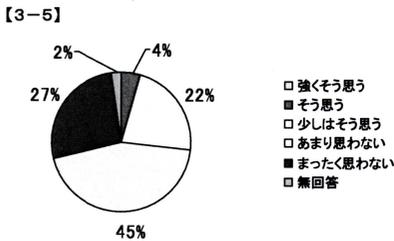
し、16%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（13%）」「そう思う（29%）」「少しはそう思う（40%）」「あまり思わない（16%）」「まったく思わない（0%）」



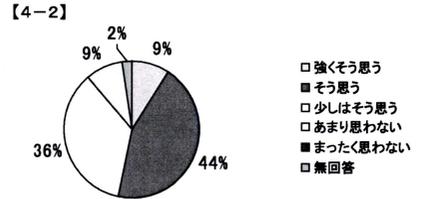
【3-5 報告を聞く必要はなかった】では26%が肯定し、72%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（0%）」「そう思う（4%）」「少しはそう思う（22%）」「あまり思わない（45%）」「まったく思わない（27%）」



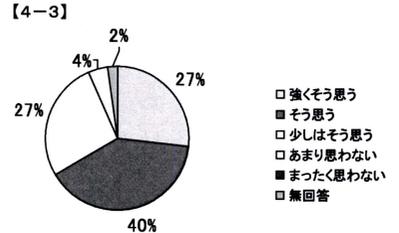
【4-2 リハーサルは実習に役立った】では89%が肯定し、9%が否定している。

内訳：「強くそう思う（9%）」「そう思う（44%）」「少しはそう思う（36%）」「あまり思わない（9%）」「まったく思わない（0%）」



【4-3 実習を通して自分は成長できた】では94%が肯定し、4%が%否定している。

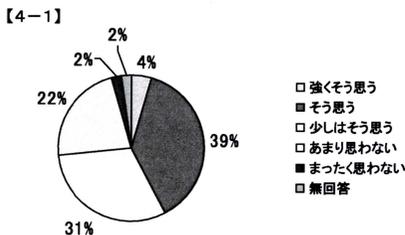
内訳：「強くそう思う（27%）」「そう思う（40%）」「少しはそう思う（27%）」「あまり思わない（4%）」「まったく思わない（0%）」



4.4 実習を終えて感じたこと

【4-1 音楽療育活動はうまくいった】では74%が肯定し、24%が%否定している。

内訳：「強くそう思う（4%）」「そう思う（39%）」「少しはそう思う（31%）」「あまり思わない（22%）」「まったく思わない（2%）」



5. 考察

5.1 実習前の自己イメージ

「実習をやめたいと思ったことがある」と答えた学生は54%を占め、また、学生のほぼ全員にあたる96%は「人前では緊張するタイプである」と答えている。人前に立って音楽療育活動を主導することは、おそらく学生にとって大きな緊張を伴うものであり、それが実習をやめたいという気持ちを起こさせる要因となったこともあると推察される。

また、実習において学生たちが必ず直面する課題が、「初対面の人と打ち解けること」「人前で話すこと」「人前で楽器を演奏すること」である。

これら3項目の中では、「人前で楽器を演奏すること

が好きである」と答えた割合が51%と最も高く、「人前で話すことが好きである(39%)」を12ポイント上回った。人前での演奏を好ましいと感じる学生は、実習において緊張を克服し、演奏を楽しむことができるのではないかと推察する。

5.2 リハーサルを経験して感じたこと

「リハーサルはうまくできた」と答えた学生は40%であったが、その内訳は「強くそう思う(0%)」「そう思う(0%)」「少しはそう思う(40%)」である。つまり、自己評価としては「リハーサルは少しうまくできた部分がある」という程度である。

このように、学生のほとんどがリハーサルの出来ばえを十分評価していないにもかかわらず、「リハーサルをして実習の自信がついた」と67%が肯定した。うまくできたことに由来する自信ではないことは言うまでもない。この自信の背景には、「自分の準備不足に気づいた(肯定94%)」ことや、「実習への不安が軽減した(肯定70%)」ことが要因として考えられる。

「リハーサルは緊張した(肯定85%)」という回答は、自己イメージを問う質問の「人前では緊張するタイプである(肯定96%)」を下回ったものの、実際に人前に立って感じた緊張はほぼ予想通りであったようだ。

「リハーサルはしたくなかった(肯定58%)」、「リハーサルは必要ない(24%)」という結果からは、リハーサルはしたくないが、その必要性は認識しているという学生の心情が察せられる。

5.3 他の人の実習報告を聞いて感じたこと

「自分の実習の参考になった(肯定87%)」「実習の不安が少なくなった(肯定72%)」という結果から、学生の多くにとって他者の実習報告を聞くことが有用であったことが窺える。

一方で、「自分の実習が楽しみになった(肯定49%)」という結果からは、実習報告を聞いて実習への期待をふくらませた学生は半数にとどまったことが読み取れる。

また、実習を終えた立場で他者の報告を聞いた場合、「実習の振り返りに役立った」という回答が82%と高い割合を占め、報告を聞くことは自分の実習が終わった後々まで有用であったことが認められる。

「報告を聞く必要はなかった(肯定26%)」の内訳は、「そう思う(4%)」「少しはそう思う(22%)」であった。この結果は「自分の実習の参考になった(肯定

87%)」とは矛盾するように見えるが、報告内容の質によっては「報告を聞く必要がなかった」と学生に感じさせたものと解釈する。

保育音楽療育においては、演奏や歌唱といった音楽表現と同程度に、話すことを中心とするコミュニケーション能力が重視される。「実習後の報告」は自分の経験を客観視し、言語化するトレーニングになったのではないだろうか。また、報告を聞くことは、想像力をふくらませて他者の経験を感じ取るトレーニングとして機能したと考えられる。

5.4 実習を終えて感じたこと

「音楽療育活動はうまくいった(肯定74%)」、「リハーサルは実習に役立った(肯定89%)」という結果から、リハーサルの経験が役立ち、実習に手応えを感じたことが読み取れる。

「実習を通して自分は成長できた」では94%が肯定し、実習を行った学生のほとんどが実習経験に意義を感じていることが認められた。

6. まとめ・課題

アンケート結果から、「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」による指導の効果が明らかになり、実習経験の共有をめざす方法としての有効性が認められた。

次の研究課題は、今回のアンケートと同時期に実施した記述式アンケートに基づき、学生が「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」から具体的に学んだ内容について研究を深めることである。

実習における音楽療育活動は、子どもや高齢者の時間を借りて行うものである。その時間を預かる学生が知識と技能を投入して力を発揮できるように、そして、有意義な活動を展開できるように、これからも指導方法を工夫していきたい。

最後に、実習全般を直接指導された倉掛妙子先生から貴重なご助言を頂戴したことに、心からの感謝を申し上げます。

7. 参考文献

- 松井紀和(1991) 小集団体験 東京: 牧野出版
 キャロライン・ケニー(2006) フィールド・オブ・プレイ 音楽療法の「体験の場」で起こっていること 東京: 春秋社

メルセデス・パブリチェビク (2006) みんなで楽しく音楽を 音楽療法士からの提言 東京：音楽之友社

ピアスーパーバイザーからのコメント

本報告は、保育音楽療育の外部への実習の実施に関する「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」をとおして、本人の学びや気づきの効果を検証したものである。事前に自己の意識を確認させ、その難点についてリハーサルをとおして克服するよう働きかけることや、学生同士の実習体験の時間差を利用し、他者の報告から事前に問題点を抱かせる点など、その成果がみとめられた。これは他の実習関係の授業に応用できる部分があり、参考になる事例であると思われる。

(担当：家政学科 内田直子)

「特別活動の指導法」における校務演習の導入と 実践的指導力に対する学生の自己評価

森田健宏

MORITA Takehiro

新中学校学習指導要領が平成 24 年度より完全実施されることとなり、その中で子ども達には、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことが改めて示されるとともに、特に子ども達の心と人間関係を育成するための実践的指導力が求められている。この内容を具体的かつわかりやすく反映させることができる科目の1つに「特別活動」がある。現代の教職課程の教育については、平成 22 年度より「教育実践演習」が導入されるなど、具体的な場面想定による対応力や問題解決能力の育成が求められることとなっており、学習指導要領の解説書でも具体的実践例が数多く示されるようになった。この実践的指導力の育成については、著者がこれまで取り組んできた教職科目「特別活動の指導法」においても、校務シミュレーション学習を通して、教育実習以外の機会でも教育現場をイメージしながら学ぶことを意識させることにより取り組んできた。そこで、学生がこの科目を通じて何が身についたのか自己評価させることにより、本科目の意義と課題、および今日の教員養成の資質向上のあり方について検討した。

キーワード：新学習指導要領、特別活動の指導法、実践的指導力、教職課程、自己評価

1. はじめに

平成17年の文部科学大臣諮問により、現代の教員の資質向上などを含めたわが国の教育課程の基準全体の見直しが進められ、教育基本法、学校教育法の改正に伴い、学習指導要領も全校種共に改訂されるようになった。これは、今日の学校教育における様々な現実的課題に対し、積極的に改善を図ろうとしたものであり、例えば、「確かな学力」の定着を目指して基礎的・基本的な知識・技能を重視した学習内容の充実が取り入れられている。これは、今まで取り組んできた「ゆとり教育」の考え方を見直すものと評価されることも多いが、一方で、いわゆる知識偏重の詰め込み型教育への逆戻りであると批判される言及も見られる。事実、学生の中にも「私たちはゆとり教育の失敗作」と自虐的かつ制度を嘲笑する発言をする者も少なからずおり、

教員養成に携わる者としても非常に思い悩む問題である。しかしながら、これは制度の急激な変化に対する現場の認識の違いが生じていると考えることもでき、肯定的な面としては、自主的、創造的な取り組みが学校の中で容認される傾向になったことが挙げられ、また否定的な面としては、ゆとりとされる時間の取り扱い、解釈が大きく様々に分かれることになったことが代表的な見解として挙げられるであろう。また、PISA調査における国際間比較の結果が、学力低下や国際競争力への懸念として表れ、学習指導要領の改訂への直接原因になったと述べられているものもあるが、一種の横断的測定によるものに過ぎないと見ることもできる。そのため、「ゆとり教育」を通じて何が育ったのかをステレオタイプの批判を避けて検証する取り組みがあまりにおろそかになっているという現実も指摘できよう。この「ゆとり教育」の是非論はともかくとして、その制度に基づき育った世代をどう捉え、今後、

どのような活躍に期待するかを、制度設計時の考えに任せるだけでなく、改めて能力の肯定的側面を見て検討すべきであると考え。このような様々な意味での教育格差を是正するものとして、新学習指導要領では内容の充実化とともに、解説書において具体的な記述が数多く見られる。このうち、中学校の新学習指導要領は、一部科目の先行的な移行を実施しながら平成24年度より完全実施されることとなっているが、その内容を見ると、子ども達には、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことが改めて示されるとともに、特に子ども達の「心」と「人間関係」を育成するための実践的指導力が今日の教員に求められているという点も注目できる。これは、当然、現代の子ども達が良好な人間関係を築く力やコミュニケーション能力が低下していることの反映であり、今後、適切な範囲の競争や協同による学びを通じて社会に参加する基本的な能力を養おうとするものであると思われるが、これを学校教育の中で重点的に取り組まなければならないという趣旨が示されていることについて我々は留意しなければならない。すなわち、基本的なコミュニケーション能力や、協調性、愛他心などの道徳性については、本来、幼少期までの家庭教育をはじめ、ある種人間社会の自然な営みの中で当然のものとして育まれるべきものと考えられるが、今日の現実的な子ども達の日常生活行動を考えると、これらをスキルとして捉え、あるいはリテラシーと同様なものとして教え、身につけさせるべきものとしなければならないという考えに基づくものである。また、そのための教材として、例えば、道徳教育において「心のノート」が国により配布されていることや、NHK教育番組でも、幼児～小学校低学年向けの番組として「わたしのきもち」が放映され、「謝るスキル」、「仲間を求めるスキル」などを教えようとするものが現れたことから方策として伺える（「わたしのきもち」は平成22年3月に放送終了）。これら内容の是非は議論の余地があるものの、このような形で教えなければ身につかないという考え方が現れた現実を我々はきちんと受けとめなければならない。

そこで、学校教育の中で、このような人間関係力やコミュニケーション能力を具体的に育むことができる機会の1つとして「特別活動」がある。もちろん、教科教育でも協同的な学習活動を通じて協同性などは育まれるのであるが、児童・生徒がこれら目的を主たるものとして取り組みやすいという点では、当然重視さ

れる機会であると思われる。今回の新中学校学習指導要領のうち、「特別活動」については、「改善の基本方針」において、「望ましい集団活動や体験的な活動を通して」自主的、実践的な態度や人間関係を築くという基本的な考え方は保持されながら、活動のねらいや意義、教育目標を「明確にする」ことが示されている。これは、教育現場における学校行事等が、前改訂による年間授業時間の減少に伴い特別活動の時間が削減または簡略化されたり、特別活動の教育的意義を考えることが少なく形式的に消化されたりすることなどに対し、本来の意味を確認する意味を持つと思われる。また、「総則」に加え、改めて「人間関係を構築する能力や自信を持って主体的に参画する能力を育成する」という考え方が示されている。これらの能力を児童・生徒に育成するという考え方を教師が有するためには、当然ながら、日頃から教師自身が実際に良好な人間関係を築く能力を持ち、職員間の協同性、協調性を意識した活動ができなければ、とうてい指導にあたることなどできないであろう。すなわち、これは学習指導要領の改訂による現職教員への留意事項では留まらず、現代の教員養成課程に対しても強く求められている育成事項であると考えることができる。さらに、平成22年3月に発行された「生徒指導提要」でも第2章第4節に「特別活動の目標と生徒指導」が設けられ、例えば「それぞれが個性や自己の能力を生かし、互いの人格を尊重し合って生きることの大切さを学ぶ」ことなどが示されており、自己の能力を生かして自己実現を図っていくことの大切さが明記されている。このような経験が教職志望学生に活かされるならば、間違っても教職員間のいじめ問題などは生じないであろう。

そこで著者は、これまで教職科目「特別活動の指導法」において、主に校務シミュレーション学習法を通して、教育実習以外の機会でも教育現場をイメージしながら協同性やリーダーシップ性を意識させることに取り組んできた。特に、模擬職員会議や学校行事等の準備シミュレーションによるグループ学習を通じ、教員に必要な協調性や協同性を再認識させることを目的として実践してきている。しかしながら、その効果を明らかにするためには、学習者側にこの科目をどう受けとめ、具体的に何が身についたのか自己評価させることが必要と考える。そこで、学生の自己評価アンケートを通じ、本科目の意義と課題、及び今日の教員養成の資質向上のあり方について検討した。

2. 方法

調査期間：平成22年8月24日～27日

材料：調査用紙1部（※項目については表1参照）

教育実践の対象：私立S大学の中学校・高等学校教員
免許状対象の教職課程受講の2回生
（校種および免許科目は学部により異なり、「英語」「国語」「社会（公民）」「家庭」「栄養教諭」のいずれかに該当する。）

担当科目および実施形態：「特別活動の指導法」（講義2単位）として開講。前期集中講義4日間で実施している。

教育内容およびシラバス等：

- ・ 第1日目：「特別活動」の学習指導要領に基づく解説と教員の教育活動および業務の実際

第1講：教師の仕事の1日
第2講：学習指導要領における「特別活動」
第3講：「特別活動」に示される内容の実際
第4講：「特別活動」の指導案について

- ・ 第2日目：「特別活動」の学習指導要領に示される内容の理解と体験学習に基づく配慮事項の検討

第5講：グループ学習による模擬「職員会議」
第6講：「体育祭」の指導案検討と作成
第7講：「体育祭」の運用に関する体験学習（1）
第8講：「体育祭」の運用に関する体験学習（2）および指導案の振り返り

- ・ 第3日目：「特別活動」の実践的運用シミュレーションを教員の視点から考える

第9講：「修学旅行」の計画（1）校務の視点
第10講：「修学旅行」の計画（2）学習指導要領
第11講：「修学旅行」の計画（3）事前学習
第12講：「修学旅行」の計画（4）実施計画起案書

- ・ 第4日目：「特別活動」の実践的運用シミュレーションを教員の視点から考える

第13講：「修学旅行」の計画（5）実地シミュレーション
第14講：「修学旅行」の計画（6）しおり及び保護者向け連絡文書の作成
第15講：「修学旅行」の計画（7）プレゼンテーションと総括

なお、上記の教育内容、ねらいと詳細については、森田（2009）で述べているが、教材企画・開発にあたっては、現職教員の支援、助言を得て、実際の校務運用に即した内容になっている。

手続き：本調査は、最終授業時に評価に影響しない条件を提示して、無記名により実施している。調査用紙を受講生に配布し、次の通り、教示文を提示している。「次の各項目は、みなさんが将来、教師になったときに必要とされると考えられる内容で、また、この授業で培えることを想定した内容です。全ての授業が終わった今、下記の内容が自分にどの程度備わっているか、自己評価してください。さらに、今回の授業を通して「身についた」「成長した」と思えた項目には、項目番号に◎を付けてください。」なお、回答欄は6段階評定法（6.とてもそう思う～1.全くそう思わない）で設定している。調査内容のカテゴリーは、中学校学習指導要領「特別活動」の「目標」に示される文言に基づき、＜望ましい集団行動 1-集団の統率力、2-集団への適応力＞、＜自主的・実践的態度＞、＜人間関係を育む資質・意識＞、＜生き方・在り方＞の4つで構成している。

3. 結果と考察

本調査の基本統計量は表1に示す通りである。平均評定値の範囲は3.93～5.51と高い傾向にあり、全体的には受講生がこの講義を通して、特別活動の目標に示している事項について習得すべき学習内容あるいは意識すべき課題を認識できていたものと思われる。

カテゴリー別に見ると、＜人間関係を育む資質・意識＞、＜望ましい集団行動 2-集団への適応力＞の2つのカテゴリーがいずれも高い値となっている。これら2つのカテゴリーに共通する内容を推測すると、「人間関係」「協同性」を意識したものとなっている。教師の指導力に関しては、社会心理学の分野で知られるPM理論（三隅，1966）が教育分野でも援用されることが多い。すなわち、リーダーシップをP（Performance）「目標達成能力」とM（Maintenance）「集団維持能力」の2つの能力要素で構成されるとし、目標設定や計画立案、メンバーへの指示などにより目標を達成する能力（P）と、メンバー間の人間関係を良好に保ち、集団のまとまりを維持する能力（M）の2つの能力の大きさによって、4つのリーダーシップタイプ（PM型、Pm型、pM型、pm型）に分類され、PとMが共に高い状態（PM型）のリーダーシップが望ましい、とした理論である。このリーダーシップ行動論は、その後、様々な心理学者によって明らかにされてきているが、いずれも課題達

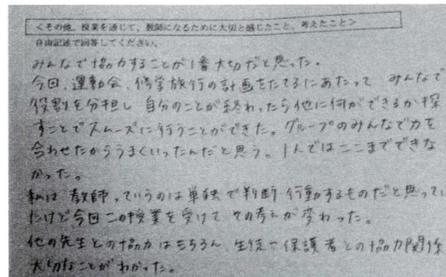
表1 本調査の基本統計量（評定平均値および各段階の評定者数）

	平均	1	2	3	4	5	6
<望ましい集団行動>		全平均=56.02 (/ 72)					
<望ましい集団行動-1 集団の統率力>		平均=26.02 (/ 36)					
1. みんなに必要な指示をすることができる。	4.40	0	1	9	15	8	10
2. みんなにわかりやすく説明ができる。	4.19	0	2	8	16	14	3
3. 仲間をひっぱっていくことができる。	3.93	0	5	12	14	5	7
4. みんなの意見をまとめることができる。	4.16	0	4	7	15	12	5
5. 仲間一人ひとりの意見をきちんと聞くことができる。	4.88	0	0	4	10	16	13
6. 仲間それぞれの想いや考えを察することができる。	4.47	0	2	7	10	17	7
<望ましい集団行動-2 集団への適応力>		平均= 30.00 (/ 36)					
7. みんなと協調して行動することができる。	5.12	0	0	0	12	14	17
8. 自分と異なる意見を尊重することができる。	4.74	0	1	2	14	16	10
9. グループの協力関係に参加することができる。	5.21	0	0	1	5	21	16
10. 他人の発言に対し、前向きな意見を加えていくことができる。	4.53	0	2	4	14	15	8
11. 仲間の成功、達成を素直に喜ぶことができる。	5.47	0	0	1	3	14	25
12. 仲間の失敗に対し、積極的にフォローすることができる。	4.93	0	0	4	11	12	16
<自主的・実践的態度>		平均=26.54 (/ 36)					
1. 文や言葉で計画した事を具体化させるイメージを持つ事ができる。	4.67	0	0	4	15	15	9
2. 自分達の計画に対して、様々なハプニングを想定することができる。	4.07	0	3	8	20	7	5
3. 自分で役割を考え、自分から行動に移すことができる。	4.77	0	1	5	9	16	12
4. 共同活動で何が足りないか見つけその役割を果たす事ができる。	4.21	0	3	7	17	10	6
5. 自分が考えたことを文書にまとめ、仲間に説明することができる。	4.14	0	5	7	15	9	7
6. 自分たちの行動に対して良かった事や改善点などの評価ができる。	4.67	0	1	4	9	23	6
<人間関係を育む資質・意識>		平均=31.40 (/ 36)					
1. 困っている仲間がいたら、すぐに助けてあげたいと思う。	5.13	0	0	3	9	10	21
2. 仲間のことを詳しく知る事は共同活動にとって大切だと思う。	5.51	0	0	1	5	8	29
3. なるべく仲間の良いところを見るようにしてあげたいと思う。	5.47	0	0	0	5	13	25
4. 感謝・反省の言葉を素直に言えるほうだ。	5.23	0	1	2	4	15	21
5. 友人は自分から得るものだと思っている。	4.95	0	1	1	11	16	14
6. 人とかわかることが基本的に好きである。	5.09	0	0	0	7	13	20
<生き方・在り方>		平均=26.84 (/ 36)					
1. 自分の人生を見通しを立てて考えることができる。	4.60	0	2	5	10	17	9
2. 自分が少しずつでも、日々成長していることを感じる事ができる。	4.49	0	0	8	12	17	6
3. 将来のために、今できることを考えたり、取り組むことができる。	4.56	0	1	8	11	12	11
4. 今、自分が置かれている状況を冷静に考えることができる。	4.39	0	2	5	17	12	7
5. 自分が周囲のために何が出来るかを考えられる。	4.56	0	1	5	12	19	6
6. 自分が周囲に与えている影響を理解することができる。	4.23	0	3	8	13	14	5

なお、この授業を通して特に身についた項目について回答させた結果、「2. 仲間のことを詳しく知る事は共同活動にとって大切だと思う。」(回答率=51.2%)、「5. 自分が周囲のために何が出来るかを考えられる。」(回答率=44.2%)、「3. 自分で役割を考え、自分から行動に移すことができる。」(回答率=44.2%)、「9. グループの協力関係に参加することができる。」(回答率=41.9%)が上位項目となった。

成 (Task) 機能と、人間関係 (Relation) の2つの機能で説明しているものがほとんどであり、時代は経過しているものの現代でも十分適用可能な考え方であると思われる。この理論に基づけば、受講生の自己評価の中でM型 (集団維持能力) の考え方が支持され、これを達成できたと考える学生が多いことが伺える。実際の講義では、グループ学習による「職員会議」「修学旅行の計画書作成」など協同性を強く意識しなければならない課題が確かに多いが、一方で、例えば、「体育祭の運用」というように他の受講生に対しP型 (目標達成能力) による説明と牽引の役割も課題には含んでいる。しかし、これらを自己評価において高く捉えたことは、学生達が授業を通して、特別活動を運用するには、これらを必要能力と考えたとみることでもできる。今回の新学習指導要領でも「良好な人間関係を築く力の育成」が掲げられていることから、児童・生徒が特別活動を通して具体的に仲間作りや共同的活動に取り組むためには、範として自身の社会的スキルや人間関係力が重要だと考えたものと推測することもできる。これについては、以下の通り、自由記述回答にも数多く示されていた。

で役割を分担し、自分のことが終わったら他に何ができるか探すことでスムーズに行うことができた。グループのみんなで力を合わせたからうまくいったんだと思う。1人ではここまでできなかった。私は、教師っていうのは単独で判断・行動するものだと思っていたけど、今回授業を受けてその考えが変わった。他の先生との協力はもちろん、生徒や保護者との協力関係もたいせつなことがわかった。

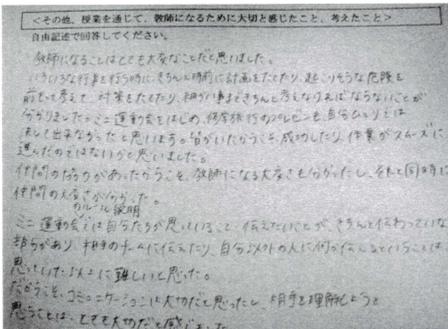


この記述のように教科教育法における模擬授業などを通じて、教師とは、教壇に立って個人でクラスを支配していくものだというイメージを持つ学生も少なくない。今回のシミュレーション学習を通じて、いかに教師もまた協同性が重要であることを認識できたという成果は意義の大きいものであると自負している。

次に、カテゴリー別の評価において、評定平均値が上記に比べて低くなったのが、〈望ましい集団行動1-集団の統率力〉、〈自主的・実践的態度〉、〈生き方・在り方〉の3つである。項目ごとに見ると、とりわけ直接的にP機能について記されているもの (例：仲間をひっぱっていくことができる。) については、低く評価している学生が多いことが表1から伺える。実際の授業の中で行った「体育祭の運用体験」では、グループごとに競技種目を企画し、他のグループにその場で説明をして参加してもらう形で運用している。そのため、自分たち頭の中では理解できていても、他者に理解をさせることの難しさ、特に、想定外の事態への対応や、言葉によって異なる解釈がなされる可能性を想定することが難しいという学生は自由記述の回答から多く見られた。説明の失敗や予期せぬトラブルなどは本番で説明をしてみても初めて気づくというケースがほとんどであり、事後の反省会で必ず指摘される内容となっている。この機会を通じて、P機能に関して低く評価をする学生が多数いるものと考えているが、学生の段階で気づけたことは、今後の教職に関する学習にも有効であると考えている。

<記述例1>

教師になることはとても大変なことだと思います。いろいろな行事を行うときに、きちんと事前に計画を立てたり、起こりそうな事件などを考えて、前もって計画をたてたり、細かいことまできちんと考えなければならぬことがわかりました。ミニ運動会をはじめ、修学旅行のプレゼンも自分一人では決してできなかったと思います。皆がいたからこそ、教師になる大変さもわかったし、仲間の大変さが分かった。



<記述例2>

みんなで協力することが1番大切だと思った。今回、運動会、修学旅行の計画を立てるにあたって、みんな



〈写真1〉 模擬職員会議の様子



〈写真2〉 体育祭運用実習の様子

最後に、この授業を通じて「特に身についた」と思った項目については、いずれの内容についても、やはり「共同活動の重要性」「協力関係への参加」など、共同活動の「場」に積極的に参加し、協動的に取り組むことや協力的な目的で主体性を発揮することなどが含まれている。このように、教員の多様な協力関係によって、特別活動が成り立ち、スムーズな運用が可能になることを授業を通して理解してくれることを期待し、また、教科教育以外の教師の職務についても理解を深めて、教職志望の意識を高めてほしいと願っている。

4. まとめと今後の課題

教職教養科目「特別活動の指導法」の授業では「講義+演習併用型」の授業を通して、知識だけに偏らない学生の実践的指導力の育成を目指し、また、校務シミュレーション学習を通して教職の理解を深め、モチベーションを維持させることを目的として、これまで取り組んできた。これら内容に対して、学生に習得内容の自己評価を求め、検討したところ、いずれの内容についても比較的高く評価されているものの、リーダーシップ行動論に基づく解釈をすると、P機能（目的

達成機能）よりもM機能（集団維持機能）に関する理解が特に高く評価されていることが明らかになった。これら両機能はいずれも高くなることが望ましい（三隅, 1966）ということから、今後、主導性を意識できるP機能に関する演習内容を取り込むことにより、さらなる向上を目指していきたいと考えている。

なお、今回の調査の課題としては、自由記述の内容に対する分析と考察について十分に取り組みなかつたことが挙げられる。これは、分析環境が十分でないための手法の限界でもあるが、質問項目にとらわれない受講生の意識を、今後、テキストマイニングの手法により、どのようなキーワードが特別活動の指導法に対して必要な学習内容と意識されているかを明らかにするなど、さらに考察を深めていきたいと考えている。

5. 引用文献・参考文献

- 桑原憲一（1999）学校行事を学級に生かす指導の方法「特別活動研究」, 392, 5-7.
- 三隅二不二（1966）「新しいリーダーシップ 集団指導の行動科学」 東京：ダイヤモンド社
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説「特別活動編」 東京：ぎょうせい.
- 文部科学省（2010）生徒指導提要. 東京：教育図書.
- 森嶋昭伸（2000）中学校特別活動の新研究課題は何か「ガイダンス機能の充実を目指して」 「特別活動研究」, 404, 110-112.
- 宇留田敬一（1997）特別活動の基礎理論と実践 東京：明治図書.

ピアスーパバイザーからのコメント

自己評価の5つのカテゴリーの6段階評価と記述式は学生が指導者になるための具体的な指標になるので、本研究の校務演習を導入した「特別活動の指導法」は実践的指導力の育成につながる講義であると思われる。そして、本研究から良い指導とは「 $1+1=2$ 」ではなく「 $1+1=2+\alpha$ 」で、この「 $+\alpha$ 」を導き出すためには知識だけでなく、知恵が重要であることに改めて気付かされた。今後の本研究による学生の成果に期待したい。

（担当：家政学科 藤島みち）

大学における地域子育て支援

—しゅくたん広場での実践—

井上千晶・番匠明美・三木麻子

INOUE Chiaki・BANSHO Akemi・MIKI Asako

本論文は、夙川学院短期大学における子育て支援ルーム「しゅくたん広場」開室から約1年半の取り組みについて報告するものである。これまでの実践から、西宮市地域子育てセンター事業の一環として開室した本学の広場は、主に2歳までの子どもとその親が安心できる居場所として、地域に根づいていることがわかった。その活動に関して、親の育ちを支える試みとし、まず月1～2回、様々な分野から講師を招き講座を開催していること、次に学内施設の利用者への開放と問題点について報告した。また、次世代を担う学生の学びとしての試みについては、ボランティア学生の活動や実習前指導の場として広場を活用している例から、日常では乳児と触れ合う機会の少ない学生が広場での体験を通して成長する様子が捉えられた。以上の利用状況を踏まえ、地域と大学においてしゅくたん広場が存在する意味が示唆された。個々の親子や家族のあり方を大切にしたい、本学における広場の活動の重要性を検討することが今後の課題となった。

ここでは本学での事例報告を行うことで、地域に根ざした大学における子育て支援の今後の実践と研究について検討するための基礎的資料としたい。

キーワード：地域子育て支援・親の育ち・学生の学び

1. はじめに

子育てほど社会の変化に大きな影響を受けるものはないといわれる。少子化が進み地域での人々の結びつきが希薄になった現代社会においては、昔から受け継がれてきた子育てにおける様々な知恵や工夫の伝承が難しくなりつつある。一方、大学は先進的かつ安定した視点を発信する「人を育てる場」となる必要があり、そのような大学が地域の人々に貢献や援助を行う重要性が増している。子育て支援は「家庭支援策」であり「社会」を育てることにつながる。そのため、地域に根ざした大学における子育て支援の持つ意義は大きい。

西宮市より大学と連携した子育て事業の提案を受けて、本学の子育て支援ルーム「しゅくたん広場」は新しい親と子の育ちを考える「地域のたまり場」の役割

を目指し開室した。学内の「広場」周辺は学生、教職員の往来が頻繁で、キャンパス内で利用親子との交流も自然と深まる。親子は広場の利用を通して、大学という空間での様々な触れあいを日常的なこととして経験することができる。

ここでは広場の開室から約一年半行ってきた本学の取り組みについて報告し、今後の大学における子育て支援の実践に役立てていきたい。

2. 「しゅくたん広場」の概要

「しゅくたん広場」は西宮市の少子化対策の一環として展開された西宮市地域子育て支援センター事業であり、平成20年に児童福祉法で法制化された地域子育て支援拠点事業「ひろば型」に位置づけられる。大学の持つ知的財産、人材や専門性を生かして地域の子育

て支援に取り組む、市と連携した子育て支援ルームである。空き教室81㎡を改修、別に子ども用トイレやシャワールームを設置し、平成21年10月にオープンした。月曜日から金曜日の9時30分から15時30分まで開室（12時から13時は閉室）。4名の保育アドバイザーが2名ずつ勤務する。

広場は主に0歳～3歳の子どもとその保護者が対象で、親子で子どもの発見する遊びを共に楽しむ場としている。開室中はいつ来ても、いつ帰っても自由で、子育て家庭の交流の場でもある。

市と連携した子育て支援事業で基本となる柱は、

- ①子育て中の親子の交流の場の提供と交流の促進
- ②子育て等に関する相談・援助の実施並びに関係機関へのコーディネート
- ③地域の子育て関連情報の提供
- ④子育て及び子育て支援に関する講習会の実施

の4本である。これを円滑に運営するために、保育アドバイザーが、親子への対応（施設利用の案内、親子の遊びの見守りや遊びの提供、他の親子との交流のきっかけづくりなど）や育児相談、毎月1回開かれる講座や行事の案内、ボランティア学生の指導など広場に関する業務を行っている。（井上）

3. 利用状況から捉えられる傾向と問題

平成21年10月20日の開室より、平成23年2月末日までのしゅくたん広場利用総数はのべ7110名（開室304日間）となっている。月別に利用者数の推移を表したのが図1である。これを午前と午後に分け利用状況をグラフにしたものが図2である。開室から4ヶ月経った頃よりほぼ毎月400名以上の親子が利用するようになっている。そのなかで7月から10月の間は午前中の利用が他の月に比べ特に多くなっている。これは、今年度暑い時期が長く続いたため、屋内で自由に遊べる場所を求めて、比較的気温の低い午前中に利用者が集まったこと、また7月中旬から8月末までは週に3日、午前中に子ども用プールをしゅくたん広場前で解放し、水遊びの行事を開催した影響もあると思われる。

今年度4月以降では、1日の親子の利用者数は約26名となっている。空き教室一部屋を使用した広場では、2名の保育アドバイザーと親子が交流し、ゆったりとした“時”を共有していくために現在のこの利用数でちょうど良い空間を作り出している。

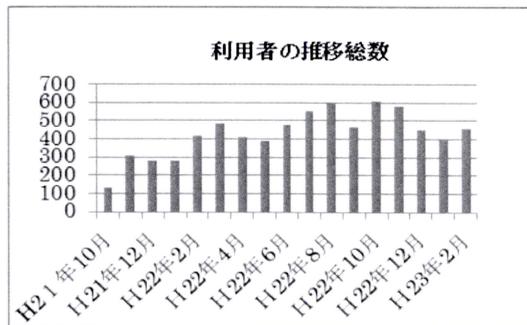


図1 利用者の推移総数

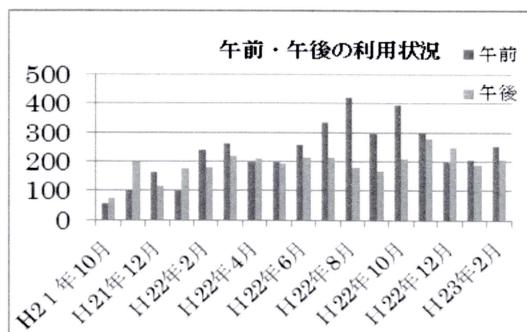


図2 午前・午後別利用者数

利用者の地域分布としては約70%が徒歩等で来室できる広場周辺地域に居住する親子で、しゅくたん広場が地域に根ざした拠点として位置づけられつつあることがわかる。一方で遠方からの利用者が約30%以上あり、支援を求める強さと大学における実践の意味を検討する必要性が感じられた。（図3）

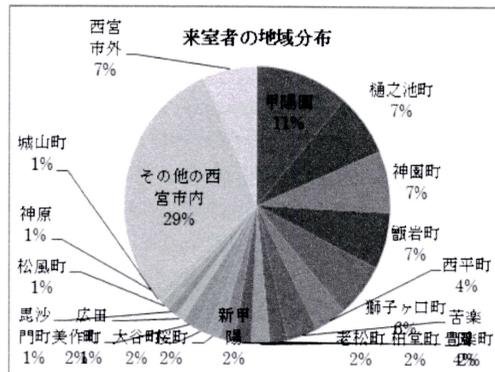


図3 来室者の地域分布

利用している子どもの年齢に関しては0歳代27%、1歳代49%、2歳代19%、3歳代4%、4歳以上が2%

となっている。乳児を育てる母親が家庭の外に何らかの結びつきを求めていることがわかる(図4)。

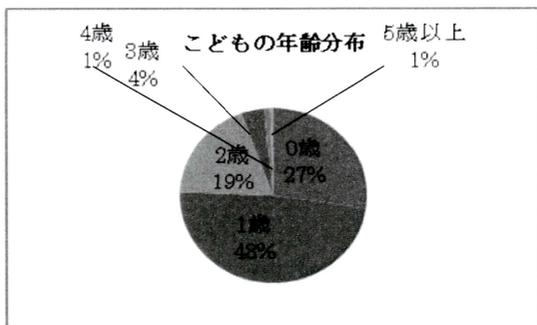


図4 子どもの年齢分布

利用頻度では月1～2回が81%、週1回が12%、週2～3回が6%、ほぼ毎日が1%である(図5)。一週間に1回以上しゅくたん広場を利用している親子が約20%あり、しゅくたん広場が親子の居場所の1つとして生活の一場面に取り入れられていることが伺われる。また、家庭とは異質の“子育ての場”を親が求めていることが考えられる。

今後は、どのような親と子の育ちを目指していくのか、その方向性を明確にした上で、サービスという視点をこえて大学という場での特色ある子育て支援を検討していくことが必要となってくるであろう。

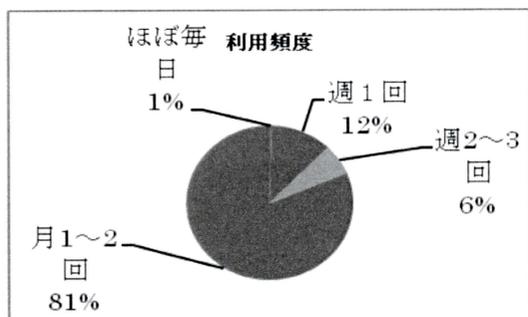


図5 利用頻度

4. 親の育ちを支える試み

(1) 講座

しゅくたん広場における子育て支援のベースには、“母親を元気にすることが子どもを健やかに育ていくことに繋がる”という考え方があり。また、テキストに頼り、子育てに正解を求めて苦しむような問題に

落ち込まないように、(母)親達を支えていきたいと考えている。「家の中で一対一で子どもと向き合い一生懸命やろうとすればするほど、子どもと一緒にいることに息苦しさを感じるようになってしまった。」と、ある母親は自分の子育てを振り返っている。そこには、存在するはずのない“良い子育て”を求めてがんばる母親の姿がある。

- ①親が自ら考える力を育み、心と体で感じるものを大切にしながら自分の子育てに自信が持てるようにする。
- ②(母)親の人としての育ちを考えるために新しい“窓”を提供する。
- ③孤立した子育てに落ち込まないように、自分らしさを認め合える仲間作りの機会を提供する。

以上の3点を主なねらいとして、様々な分野から講師を招き、講座を開催している。表1がこれまで実施してきた講座の一覧である。体験型と講義型、親のみと親子で参加できるタイプがある。本学では、参加者同士や講師とも充分に交流できるように10～20名程度の定員で設定している。



写真1 真剣な表情でタップを楽しむ受講者

講座「ワン・ツー・タップ ～タップで楽しもう」の参加者がタップダンス初体験の後、講師らと談笑していた折に「体の中が流れた感じがする」と未知の世界に触れた喜びを述べていた。受動的に聴講する形式よりも、親達と講師がテーマに向けて共に感じ考えるあり方で取り組むことにより、参加者は体験したことを自分の中のより深い所で感じ取っていくようである。親たちのこういった経験が、心の深まった関わりとなって子どもたちに伝わっていくのである。

表1 しゅくたん広場 講座一覧

年・月	開催日	講座名	講師名	具体的な講座内容	参加者		
					児童	保護者	合計
2009年10月	30日	子育て講座	保育アドバイザー	子育て相談	6	6	12
11月	25日	心を感じる講座	井上千晶 (児童教育学科・しゅくたん広場主任)	クリスマスリースを作る	0	7	7
12月	24日	心を感じる講座	倉掛妙子(児童教育学科)	音楽を楽しもう～様々な楽器に触れる～	12	12	24
2010年1月	27日	心を感じる講座	番匠明美(児童教育学科)	「私」と出会う～フェルトボールを作る～	0	9	9
2月	22日	心を感じる講座	森田健宏(児童教育学科)	親子でアロマ～好きな香りを作る	2	9	11
3月	11日	親子でふれあい講座	井上千晶・保育アドバイザー	親子体操・歌 本学学生製作おもちゃの体験	37	33	70
4月	26日	体を考える講座	岸本喜代子(本学非常勤講師)	オイルマッサージ	8	8	16
5月	19日	体を考える講座	黒江兼司(神戸徳洲会病院医師)	小児科の上手なかかり方	13	13	26
6月	2日	子育て講座	浜本直子 (絵本で子育てセンター講師)	絵本で子育て～読み聞かせて育まれる「絆」～	13	11	24
7月	5日	体を動かす講座	金築優子(本学非常勤講師)	ワッ・ソウ・タツッ ～タツッで楽しもう～	0	8	8
8月	3日	親子でふれあい講座	林有紀(児童教育学科)・井上千晶	めたくり遊びで楽しもう	10	10	20
8月	8日	*家族で楽しむ講座	井上千晶・保育アドバイザー	ペットボトルで風鈴を作ろう!!	9	15	24
8月	22日	*家族で楽しむ講座	井上千晶・保育アドバイザー	ペットボトルで風鈴を作ろう!!	7	12	19
9月	5日	*家族で楽しむ講座	井上千晶・保育アドバイザー	オリジナル布かばんづくり	6	13	19
9月	17日	親子でふれあい講座	森美奈子(家政学科)	遊びを通して学べる食育	11	10	21
10月	13日	体を考える講座	岸本喜代子(本学非常勤講師)	予防接種について	0	3	3
11月	10日	体を考える講座	岸本喜代子(本学非常勤講師)	予防接種② 冬に気をつけたい病気	9	9	18
11月	30日	心を感じる講座	井上千晶 (児童教育学科・しゅくたん広場主任)	クリスマスリースを作る	0	9	9
12月	8日	心を感じる講座	番匠明美(児童教育学科)	砂絵遊び	0	7	7
2011年1月	25日	親子でふれあい講座	井上千晶・保育アドバイザー	親子体操・歌 本学学生製作おもちゃの体験	31	30	61
2月	16日	子育て講座	早田由美子(児童教育学科)	モンテッソーリの子どもの方を学ぶ	0	7	7
3月	15日	心を感じる講座	橋喬子(家政学科)	自分に合う色を見つけよう～パーソナルカラー～			
合計	22回				174	241	415

*家族で楽しむ講座は、8月8日は保護者15名のうち、父7名・母8名、22日は12名のうち、父5名・母7名、9月5日は13名のうち、父4名・母9名が参加。

*参加者の項のうち、児童数0名の講座は、母親のみ参加のもので、おじさんは保育アドバイザーがしゅくたん広場で保育した。

*講座内容は<http://www.shukugawa-c.ac.jp/department/?m=Hiroba> 「News」で公開している。

筆者が行った「私と出会う～フェルトボール作り」の講座では、制作前から「これでちゃんとできるのか」と重ねて確認し、失敗をおそれる様子が参加者の間でしばしば見られた。上手な作品を作るよりも新しいことに挑戦する気持ち、楽しむ気持ちを大切に、「まずはやってみましょう」「作品に失敗はないですよ」と励ましていく。思い通りに出来上がらなかった作品も、自分の手で作り上げてみると、それなりに自分らしい味わいがでていることに気がつくことがある。思ったようにできなくても、意外と面白味がある。これまでとは少し異なる捉え方をしている自分に気づく。そういった適度な“よいかげんさ”を受け入れた時に親の心の中から生じてくるいきいきとした感覚が、子どもと向き合っていく気持ちにエネルギーを与えてくれる。

講座を受講して得たものが、参加者の生きている世界を今までとは少し違ったものへと変えていく。そのような触媒として働く刺激を講座を通して提供していきたいと考えている。(番匠)



写真2 「親子でふれあい遊び」の講座風景

(2) 大学施設の開放

本学では、しゅくたん広場に親子を受け入れるに際し、1号館受付前と12号館図書館入り口前に自転車やベビーカー置き場を設けた。また、1号館ホワイトホール(自動販売機やパン売場)、クリスタルホール、図書館、ミニコンビニ、学生食堂、実習食堂などの利用も可能とした。また、本学の立地を考え、学生の利用

表2 しゅくたん広場登録者の図書館利用状況

●登録・利用状況

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2009年度	登録	--	--	--	--	--	--	2	8	9	7	12	10	48
	(うち更新)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)	(--)
	利用	--	--	--	--	--	--	2	16	15	22	37	51	143

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2010年度	登録	34	9	11	8	9	3	15	12	4	2	4		111
	(うち更新)	(23)	(1)	(0)	(0)	(1)	(0)	(1)	(1)	(0)	(0)	(1)		(28)
	利用	48	41	58	49	54	48	69	86	43	50	64		610

●図書貸出冊数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2009年度		--	--	--	--	--	--	8	61	36	79	152	160	496

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2010年度		164	122	180	155	167	152	213	274	137	185	241		1990

を妨げない範囲で、学生の登学に使われるジャンボタクシーの利用も許可された。その利用状況や問題点について述べたい。

【1】図書館

本学図書館の約8万6千冊の蔵書のうち、絵本は約1万3千冊を占める。開架式書架の2階部分には、その絵本だけを別置した絵本コーナーを設け、しかけ絵本や布絵本、大型絵本や紙芝居の展示もされている。

また、2階アートギャラリーでは、学生の作品を鑑賞することができる。美術デザイン学科学生の作品展をはじめ、家政学科ファッション専攻学生の回顧展なども行われ、児童教育学科学生が制作した立体紙芝居や大型遊具などの作品も展示される。

このように、乳幼児やその保護者の世代にとっても魅力的な施設は、一部外部の方にも開放されているので、しゅくたん広場登録者（保護者）にも利用を可能にした。

外部利用者は、

- ・図書（雑誌を除く）貸出
(冊数：5冊 期間：1ヶ月)
- ・図書館資料の閲覧
- ・図書館資料の複写（有料）
- ・視聴覚資料の視聴
- ・データベース、インターネットによる情報検索を利用することができる。

また、図書館の絵本のうち、複数登録のあるものの中から、50冊を保育アドバイザーが選定し、しゅくた

ん広場への貸し出しを行っている。しゅくたん広場利用者は、広場でゆっくり床やソファに座って絵本を読むこともできるし、図書館で絵本や一般図書の閲覧、貸し出し利用もできることになる。

しゅくたん広場登録者の図書館利用状況の一覧は上記（表2）のとおりである。

しゅくたん広場利用者（保護者）の月平均はのべ約200名、2009年10月から2011年2月までの図書館利用者の月平均は44名（2010年4月からでは55名）と2割から3割近い方が利用され、また貸し出し冊数も一度に3冊以上を利用している割合となり、図書館職員の方々のご協力のおかげで図書館が有効に利用されていることがわかる。

・問題点①

広場利用者の来室は不定期であり、利用が複数年におよぶこともある。またお子さんが成長して広場を利用する年齢を超える場合もある。あくまで、広場に入室している方に、図書館も利用してもらうにはどのようにすればよいかを図書館と事前に相談した。しゅくたん広場開室が2009年10月20日であったこともあり、しゅくたん広場での登録更新（住所などの確認）は、2010年からそれぞれのお子さんの誕生月に行うこととした。これで、年1度以上の来室が確認できるため、その広場登録カードと住所確認書類を以て、図書館利用を可能とすることとした。現在、一般利用者と同様に年度末（3月末）までの図書館カードが発行されている。

・問題点② 図書館での学生と子どもの共存

短期大学図書館は本来、学生および教職員のための施設であるので、公立図書館以上の静粛さを求めたい。その意味もあり、子どもだけの来館は禁止しており、あくまで保護者が学外利用者として許可される。しかし、乳幼児を置いて図書館に入館することも難しいため、保護者に連れられて入る子どもたちについては入館を制限していない。

そこで利用者側の意識も問題となる。図書選定や資料閲覧の際に、お子さんから目を離されるケースもあり、また乳幼児に静粛を求めることも難しい面がある。職員の注意を受け入れないわけではないが、静粛が長続きしない場合もあり、学生との共存が懸念される。

図書館では年に一度学生対象のアンケートを行っており、そこに今回（2010年9月24日～29日）、しゅくたん広場利用者を想定した項目を入れて、上記の問題を諮った。短期大学2回生および専攻科生の計231名を調査対象とした、質問項目「子ども連れでの利用について気になることはありますか」に対して、その結果は、

・気になることがある	22名	10%
ない	145名	63%
・子ども連れの利用者を見たことがない	30名	13%
・無回答	34名	15%

であった。学生の意識には今のところ、子どもたちの声がさほどうるさいとは映っていないことがわかり、勉学の妨げとなっていないことには、安堵する思いである。

しかし、アートギャラリーにおける幼児美術作品展では、遊具が展示されていたため、子どもたちがそれを使った遊びに夢中になってしまうということもあった。本来の作品展では子どもたちに実際に遊んでもらう展示であるが、アートギャラリーが図書館内であるためにこれも問題となった。

学生の制作した大型遊具は、しゅくたん広場に貸し出されることもあるので、保護者には、あくまで大学図書館を利用しているという自覚を強く持っていたきたいという他ない。

【2】学生食堂・実習調理食堂の利用

しゅくたん広場が、12時～13時を閉室しているため、お弁当などの食事をホールを利用して摂られる方もある。また、学生食堂を利用される場合も想定し、教職員から寄付されたものも併せて、各食堂に子ども用食

事椅子を用意した。また、本学の家政科の大量調理実習は週に2回、学生や職員が利用して行われている。毎回バリエティに富んで栄養面に配慮された献立が安価で提供されるために、これを利用される方も多い。

・問題点

実習食堂は教員の管理の下に、学生が調理しているもので、あらかじめ食券を購入した数を調理するなどのルールがあり、食後の片付けも利用者が行うことが原則であるので、広場の利用者には利用しにくい面がある。工夫して子どもさんを待たせ、うまく食堂を利用されている方もいる反面、食べこぼした後片付けができない、自分たちの食事の間、子どもに目が行き届かないという保護者も見られた。

保育アドバイザーも昼休み時間ではあるが、食堂の様子を見に行くなど、家政学科の教員、学生や他の利用者にも迷惑のないよう配慮している。子ども連れの母親を暖かく見守る学生や職員が多い中で、手助けを受けることが必要な場合は求め、またそれに甘えることなく自己管理することも保護者に望みたいことである。

学生への教育という意味では、いろいろな場で、自分たちとは違う立場の人々に配慮できる学生、違う立場の人々を受け入れる許容力のある学生が望ましい。広場利用者との出会いがそのきっかけになって、子ども連れの母親に手を貸すなどの心遣いができるようになってほしいと願うものである。

また、今の学生が将来母親となって、広場利用者のような立場に立った時に、悪い面は反面教師として周囲に配慮のできる保護者になってくれることも望みたい。(三木)

5. 次世代を担う学生の学びとしての試み

保育者を目指して入学してくる学生の多くは、それまでに子どもと身近に接する機会が少なく、保育の実習で乳幼児と初めて出会い関わり方に悩むという現状がある。また、人とのコミュニケーションがうまく取れず、必要以上に不安を抱いて実習前に「自分に保育者は向いていない」と諦めてしまったり、実習に行っても環境に適応できないという姿が見られる。そのような学生がしゅくたん広場で子ども達と出会うことにより少しでも幼い子どもと触れ合う機会を持てることは重要である。

また、保育者養成という見地とは別に親子の姿を通して、子どもを産み、育てるということはどういうこ

とか将来の育児についてのイメージを持つことができるのも副産物といえるだろう。

・ボランティア制度

学生の学びのためにボランティア制度を設けた。全学科の学生を対象にした説明会を開き、必ず説明会に参加した上で、ボランティア登録を行った学生が、日時を予約申し込みして広場に入ることができることとした。オープンキャンパスの説明会や新入生へのオリエンテーションでも広場への見学を組みこんで、学生が広場を知り、参加してゆく下地を作っている。

ボランティア経験を通して、

- ①子どもと関わり、子どものかわいさや一緒に過ごす楽しさや喜びを味わうと共に発達を知る。
- ②保育アドバイザーの姿を通して保護者との接し方や保育の方法、実際を知り保育の仕事のやりがい学ぶ。
- ③入室する親子の姿から将来の子育てへのイメージを膨らませる。
- ④人と接することを通して多様な価値観を知る。

などを学んでくれることを目的としている。次に、ボランティア経験や授業での広場活用の事例を2例あげる。

・事例1：

中学校教諭二種免許状取得のための実習（美術・栄養士コース学生）に臨むにあたり、事前指導の一環として利用した例。コミュニケーション能力を高めることを目的とし、2～3人のグループに分かれて3日間、広場を利用する親子との触れ合いや保育アドバイザーの仕事の手伝いをした。学生が自分で考えた絵本、おもちゃなどを用意して読み聞かせや遊びを行った。前もって利用する子どもの年齢や興味について調査し、おもちゃや絵本を手作りして来る姿も見られた。この経験を通して、緊張の中にも広場の親子に自分を受け入れてもらうという経験をし、子どものかわいさや、子どもと一緒に過ごす楽しさを知ることができた。そして同時に保育アドバイザーや保護者の姿から仕事としての保育や育児の様子を垣間見ることができ、多様な価値観を知る機会になった。

・事例2：

保育専攻科生が小児保健実習授業で学んだ身体計測を「広場」で実習した。授業時間2コマ×2回にわたり、5～6人のグループに分かれて授業担当の岸本喜代子先生指導のもと、身長、体重、胸囲、頭囲を測定

した。結果はパーセントイル曲線に記入しコメントと共に保護者に渡す。広場には身体計測の実習を行うことを事前に掲示したが、市の乳児健診以外でこのような身体計測をするという機会がないので、保護者の関心が高く希望者が多かった。

授業では保育実習室で人形を使つての計測の方法を学んでいるが、広場での実習では、月齢、年齢の異なる乳幼児に対し、その姿にあった対応をしなくてはならない。学生はかなり戸惑った様子で保育アドバイザーも総出で応援しての計測となった。保育現場での実習とは違い、学校の中にある「広場」では学生達も安心感の中で実習ができる。授業担当の岸本先生をはじめ保育アドバイザーの的確な指導、子どもや保護者への対応の実際を目の当たりにし、学生たちは改めて保育の仕事へのイメージを膨らませることができたようだ。

この他にも、食育・食事マナーについての意識調査・ファッションショーでの子ども服製作モデル・遊具制作・音楽療育実習など、授業での活用が広がり全学的に「広場」が学生の学びの場として定着して来ている。

今後は学生がもっと「広場」の活用ができるように、今までの予約ボランティアに加えて、授業のちょっとした空き時間に保育アドバイザーの許可を得てボランティア活動が出来るようにしていく方向である。

(井上)

6. 今後の課題

夫婦や世代間の問題は子育てに大きな影響を与える。現在、保護者の利用者はほとんどが母親である。父親が参加できるように、8月から9月にかけて日曜日に3回、講座を兼ね広場を開室した。その結果、家族で受講する参加者が増えた。その後夫婦の間でしゅくたん広場のイメージを共有し、コミュニケーションがとりやすくなったと報告してくれる母親もいた。

父親や祖父母が、母親とは異なる立場で子どもの育ちを支える存在となるように援助していきたい。

また、講座参加などを機会に親が自主的なサークルを立ち上げることを支援できる体制作りや、地域の次世代を担う小・中・高校生らが乳幼児と触れ合う機会を提供すること、親子の抱える問題をグループや個々の相談で取りあげていくことも今後の課題である。

親という役割に閉じこもらず、子育てをしつつ、自分の生き方を模索することを支えること。そしてなによりも、子どもにとって今何が本当に大切なのかを考

えることができる子育て支援。個々の親子、家族がどうありたいのかという問題に丁寧に向き合っていくことのできるしゅくたん広場らしい取り組みを具体化させることが必要である。(番匠)

<付記>

- ・本稿は「全国保育士養成協議会第49回研究大会」(平成22年9月17日)において発表した内容をもとにしている。また、本稿は児童教育学科において、共同してしゅくたん広場開設と運営に携わる担当者が考察検討した結果を分担して執筆したものである。
- ・本学教職員の方々には開室準備の段階から運営の過程においてもあらゆる面でご協力戴いていることを感謝いたします。また、資料作成にあたっては保育アドバイザー、図書館職員の方々の協力を得たことを記して感謝いたします。

ピアスーパーバイザーからのコメント

本実践は、地域社会に開かれた実践であり、子育て中の親子の交流、相談、情報収集、そして、新たな学びを支えるものである。西欧では育児を楽しいと答える親が多いのに対して、日本では育児が否定的な回答する親が7割を占めるという調査がある。孤独な子育てになりがちな日本の現状の中で、子育て支援ルームは、親にとっては心安らぎ、また、自分を見つめなおし、さらには、わが子を客観的に捉えなおす機会となる。また、子どもにとっては母子中心の狭い人間関係から少し離れて、同年齢の子どもとの交流や保育士、学生、教職員など多様な人間と関わりをもつことができる貴重な場となる。

さらに、学生にとっても、乳幼児と触れ合う機会が極端に減少している中で、学内で日常的に親子の姿を見たり、授業やボランティアで親しく接したりするのは「自分たちとは違う立場の人々への配慮」をめざす上で得難い体験学習の機会となっている。

本実践では、短大の施設も有効活用されている。また、大学の特色ある講座も多数開かれている。約300日開室で7000人以上の利用者に加え、遠方からの利用も3割以上に上るのは関係者の様々な工夫と努力によるものである。「大学という場での特色ある支援」がさらに充実したものとなるよう今後の発展的な継続が強く望まれる。(担当: 児童教育学科 早田由美子)

あとがき

この度、『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』の第3巻を発行することとなりました。

本学 FD 委員会では、学生による授業評価アンケートをはじめとして、評価結果の Web 上での公開や定期的な学内 FD 研修会の実施、機関紙『FD Today』の発行などさまざまな活動に取り組んで参りましたが、かねてより教員同士が教育実践を発表し合い、その成果を共有していくことこそ質の高い授業につながるのではないかとの想いがありました。

今回は3編の原稿が寄せられました。昨年より投稿は少なくなりましたが、本学を取り巻く状況が大きく変化する中、FD の灯りをともし続けることができたことに安堵しております。

この「教育実践研究紀要」は、教員の相互支援精神に基づく相互研修型 FD を理想として、全学的な教育力向上の一環として発刊しております。そのため、できるだけ広範囲からの投稿がいただけるように、すべての投稿原稿を採録することを原則としています。また、『教育実践研究紀要』では査読制度を採らず、ピアスーパービジョン制度を設け、投稿者と編集協力者が、対等な視点から原稿の内容を協議し、質をより高めて採録することを目指しました。

これらの試みが本学をはじめ、大学教育全体の教育力の向上に寄与できればと願っています。

最後になりましたが、本誌の創刊にご協力いただいたすべての教職員の皆様にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

どうもありがとうございました。

2011年3月31日

夙川学院短期大学 FD 委員会

委員長 森田健宏

<平成22年度「教育実践研究紀要」執筆者一覧>

- 准教授 番匠明美 (児童教育学科/臨床心理学)
准教授 三木麻子 (児童教育学科/古典文学)
准教授 森田健宏 (児童教育学科/教育心理学)
特任講師 井上千晶 (児童教育学科/保育学)
非常勤講師 朝野典子 (児童教育学科/音楽・ピアノ)

<平成22年度「教育実践研究紀要」ピアスーパーバイザー>

- 教授 早田由美子 (児童教育学科/幼児教育学)
准教授 内田直子 (家政学科/被服学)
准教授 藤島みち (家政学科/体育学)

夙川学院短期大学「教育実践研究紀要」

第3号 (2010)

2011年3月31日発行

編集発行：夙川学院短期大学 FD委員会

〒662-8555 兵庫県西宮市甕岩町6-58
(担当事務局) 教務課内 FD委員会事務局

TEL:0798-73-9139

E-mail:fd@shukugawa-c.ac.jp

Shukugawagakuin College

Bulletin of College Educational Research

~Shukugawagakuin College FD committee~

No.3 [2010]

Articles (Applied Field Research)

<Category-3>

- A Study of Education Practice that Aimed to Share Each Student's Practical Experiences for the Program of Certified Child Music Therapist.
• • • ASANO Noriko
- Introduction of Simulation Exercise of School Affairs on Teacher Training Program for the Special Activities ; Study of Teaching Simulation Ability Based on the Data of Students Self-Evaluation.
• • • MORITA Takehiro

<Category-6>

- Parenting Activities at the College ; Practice Report of Regional Support center "SHUKUTAN HIROBA".
• • • INOUE Chiaki, BANSHO Akemi and MIKI Asako